

1 講演会・フォーラム等による研究成果の公開

[概要]

歴博は、研究の実施状況を広く内外に公開するためにさまざまな催しを行っている。主要なものとしては、歴博講演会・くらしの植物苑観察会・歴博フォーラム・歴博映像フォーラム・歴博映画の会・展示解説や、総合展示・企画展示の関連イベントがあげられる。また歴史と文化への好奇心をひらく『REKIHAKU』を刊行している。こうした催しや刊行物を通じて、研究者のみならず一般の方々にも歴博の活動に興味と関心を持っていただくことを目的として、総合資料学に基づく研究活動とその成果の発信を行っている。

2023度は、歴博講演会8回、くらしの植物苑観察会11回、歴博フォーラム3回、歴博映像フォーラム1回、歴博映画の会2回を実施した。新型コロナウイルス感染症対策の緩和に伴い、展示室内でのギャラリートークを再開した。これらの事業を通じて研究成果の発信と周知、それに伴う討論や反響を経て、さらなる調査研究の課題を模索している。

広報連携センター長 高田 貫太

[講演会・フォーラム等]

歴博講演会 不定期の第2土曜日13:00~15:00 国立歴史民俗博物館講堂にて

本館教員や館外の研究者が、自らの研究分野の最新情報を一般の聴講者にも分かり易く発表する。不定期の第2土曜日に本館講堂で実施し、2023年度は8回開催した。

開催日程・演題・講師については「第二部 事業編 IX 広報・普及 2 歴博講演会」を参照。

くらしの植物苑観察会 毎月第4土曜日13:30~15:30 (12月は第3土曜日) もしくは平日13:30~15:30
くらしの植物苑にて

くらしの植物苑は、生活文化を支えてきた植物を系統的に植栽し、素材となった植物と博物館の展示資料を関連づけ、歴史への理解を深めることを目的として、1995年9月に開設した。観察会は、一般の方を対象に実施し、四季折々の植物を観察し、人と植物とのかかわりについての理解を深めている。2023年度は11回開催した。

開催日程・演題・講師については「第二部 事業編 IX 広報・普及 4 くらしの植物苑観察会」を参照。

歴博フォーラム・歴博映像フォーラム等

第115回歴博フォーラム

「いにしへの「玉手箱」、近世好古図録をひらく」2023年4月1日(土)

主催 国立歴史民俗博物館

会場 国立歴史民俗博物館 講堂

参加者 98名

1. 開催趣旨

企画展示「いにしえが、好きっ！—近世好古図録の文化誌—」の開催と連動して、企画展示の紹介を交えながら、研究成果の発信を目的とする。

本企画展示の主人公である『聆涛閣集古帖』には、考古、文書・美術工芸・画像など、さまざまなジャンルの歴史資料が登場する。さながら「いにしへの玉手箱」である。ここに描かれた古器物が、どのようにコレクションされ、それらはいまどのように伝わっているのか。共同研究の成果ならびに企画展示の準備の過程で明らかになった研究実践の成果を披露する。

2. 開催内容

13:00~13:10 開会挨拶 西谷 大(国立歴史民俗博物館 館長)

13:10~13:25 趣旨説明 三上 喜孝(国立歴史民俗博物館研究部・教授)

13:25~13:50 吉田 広(愛媛大学ミュージアム・教授)

- 「弥生時代石剣の集古帖への記載」
 13：50～14：15 村野 正景（京都文化博物館・学芸員）
 「集古帖の瓦帖が語る藤貞幹の古瓦譜編集過程」
 14：15～14：40 清水 健（東京国立博物館学芸研究部調査研究課工芸室・主任研究員）
 「近世好古図録に描かれた寺社宝物」
 14：40～14：55 休憩
 14：55～15：20 落合 里麻（東北生活文化大学・講師）
 「網代輿を「作る」視点で考える」
 15：20～15：45 加藤 明恵（神戸大学大学院人文学研究科・特命助教）
 「『集古十種』編纂をめぐる吉田道可と松平定信の交流」
 15：45～16：10 山下 大輔（関西大学博物館・学芸員）
 「『聆涛閣集古帖』と本山コレクション」
 16：10～16：25 全体を通しての質疑応答
 16：25～16：30 閉会挨拶 三上 喜孝（国立歴史民俗博物館研究部・教授）

総合司会：三上 喜孝（国立歴史民俗博物館研究部・教授）

3. 総括

いわゆる「コロナ禍」以降初めて、定員を「コロナ禍前」に戻しての募集であったが、参加者数は98名と振るわなかった。その理由としては、新年度の初日である4月1日に日程を設定したところが大きいと思われる。登壇者の日程調整の都合上、どうしてもこの日にせざるを得なかったというやむを得ぬ事情があったものの、年度の変わり目早々ということで、本来であれば避けるべき日程であった。それにもかかわらず実現できたのは、広報連携センターや広報サービス室のご理解ご尽力のたまものである。まずはこのことに対して深く感謝申し上げたい。

アンケートを分析すると、歴博フォーラムに参加された年代は、60代以上が圧倒的に多い。これは4月9日（日）の「友の会」の講演会においても感じたことだが、今回の企画展示の観覧者は、必ずしもそうした年齢層が多かったわけではなく、むしろそれよりも下の世代の人たちも目立っていた。すなわち、企画展示の観覧者の実際の年齢層と、歴博フォーラムの参加者の年齢層との間には、齟齬がみられるようにも感じたのである。この点についてはなお精査していかなければならないが、いずれにしても、いわゆる「若い世代」の人たちを、歴博フォーラムという場に引き込むことができなかつたのは、大きな反省点である。どのように工夫すれば幅広い世代を引き込めるかが課題として残った。

ただ、それによってこの歴博フォーラムの意義が損なわれたということでは断じてない。歴博フォーラムに参加したことにより、企画展示の内容についての理解がより深まったとする感想が数多くみられたことは、アンケートの自由記述を見ても明らかである。内容を盛り込みすぎて時間が足りなかつたのはやむを得ぬことだったが、それだけの情報量と熱量をあえて示すことで企画展示のねらいや多様な視点を示すことができたと自負している。

第116回歴博フォーラム

「中世公家の〈公務〉と生活—広橋家記録の世界—」2023年4月15日（土）

主催 国立歴史民俗博物館

会場 国立歴史民俗博物館 講堂

参加者 202名

1. 開催趣旨

2023年3月7日～5月7日に開催予定の特集展示「中世公家の〈公務〉と生活—広橋家記録の世界—」の内容を詳しく紹介し、一般観覧者に展示をいっそう深く理解してもらうためのフォーラムを実施する。家永は広橋家の歴史、尾上・高橋・榎原・湯川は広橋家当主の日記である『民経記』『勘仲記』『兼宣公記』『守光公記』の原本調査と翻刻の営み、久水は朝廷と幕府との財務連繫業務について紹介する。また、「広橋家旧蔵記録文書典籍類」の形成過程についても適宜紹介する。

2. 開催内容

13：00～13：10 開会挨拶 西谷 大（国立歴史民俗博物館・館長）

- 13：10～13：40 家永 遵嗣（学習院大学文学部史学科・教授）
「中世公家広橋家の歴史と『広橋家旧蔵記録文書典籍類』」
- 13：40～14：10 尾上 陽介（東京大学・史料編纂所・教授）
「『民経記』にみる家記の整備と継承」
- 14：10～14：40 高橋 秀樹（國學院大學・文学部史学科・教授）
「『勘仲記』の筆録意識」
（休憩）
- 14：50～15：20 榎原 雅治（地震予知総合研究振興会・副首席主任研究員）
「『兼宣公記』の形態変化と広橋兼宣の人生」
- 15：20～15：50 湯川 敏治（学識経験者）
「『守光公記』の特徴について—一女房奉書を中心として—」
- 15：50～16：20 久水 俊和（追手門学院大学・文学部人文学科・准教授）
「中世国家の財布のひもを握るのは朝廷か幕府か」
- 16：20～16：30 閉会挨拶 家永 遵嗣

総合司会：田中 大喜（国立歴史民俗博物館研究部歴史研究系・准教授）

3. 総括

各報告は、観覧者に特集展示の内容をいっそう深く理解してもらうとともに、特に一般観覧者にはなじみの薄い中世公家の文献資料を紹介するものであった。アンケートによると、参加者の76パーセントの方々から「よかった」という感想をいただくことができた。「どちらかというよかった」という感想と合わせると、94パーセントの方々から好意的に受け取られたことになる。個別の感想を見ても、「広橋家の文書から中世社会の構造・変化がよくわかった」という感想をいただき、また書籍化の要望も複数いただけたので、フォーラムは全体としてうまくいったと考える。ただ、開始早々に映像機器の不具合によりスクリーン投影ができないというトラブルに見舞われ、家永先生にはご迷惑をかける仕儀となった。事前にテストはしていたものの、直前にも再度テストするなど、万全を期すべきだった。

今回のフォーラムには定員いっぱいの232名の方々から参加申し込みをいただき、実際、当日は雨天にも関わらずほぼ満席となる盛況ぶりだった。「中世の公家」という一般的にはなじみの薄いテーマだったため、これほどの人数が集まるとは思ってもよらず、うれしい誤算となった。書籍化を要望する声も多く、「中世の公家」そして広橋家旧蔵記録文書典籍類に対する関心の高さを確認できたことは収穫だった。こうした社会的関心の高さに鑑み、本フォーラムの成果および広橋家旧蔵記録文書典籍類の調査成果は総合展示第2室のリニューアルにも積極的に反映させていくべきことを実感した次第である。

第117回歴博フォーラム

「陰陽師と暦」2023年10月7日（土）

主催 国立歴史民俗博物館

会場 国立歴史民俗博物館 講堂

参加者 225名

1. 開催趣旨

企画展「陰陽師とは何者か」の開催と連動して、展示内容を最新の研究動向をふまえて、多角的に発信することを目的とする。

陰陽師の職掌として編暦は古くから重要なものであったが、その具体的な内容や社会的な影響などについてはあまり知られていない。本フォーラムでは陰陽師研究を重ねてきた研究者と暦研究者とが一堂に会し、研究の現状を相互に披露することで、両者の関係を問い直し、新たな研究の可能性を模索することを試みたい。

企画展示の期間中に開催することで、入館者により深い展示理解の可能性を提供するとともに展示内容を展示室以外の「場」から発信することとしたい。

なお、このフォーラムは科学研究費基盤研究（C）「古代～近代陰陽道史料群の歴史の変遷と相互関係の解明」の成果報告の一部でもある。

2. 開催内容

- 12：30～12：40 開会挨拶 西谷 大（国立歴史民俗博物館・館長）
 12：40～13：10 「陰陽師の誕生」細井 浩志（活水女子大学・国際文化学部・教授）
 13：10～13：40 「渋川春海の貞享改暦」林 淳（愛知学院大学・文学部・客員教授）
 13：40～14：10 「明治改暦—日本らしい暦の模索」下村 育世（日本学術振興会・特別研究員）
 14：10～14：40 「暦の民俗とその背景」小池 淳一（国立歴史民俗博物館・民俗学研究系・教授）
 14：40～15：00 休憩
 15：00～15：10 コメント1・梅田 千尋（京都女子大学・文学部・教授）
 15：10～15：20 コメント2・マティアス・ハイエク（フランス高等研究実習院（EPHE-PSL）・教授）
 15：20～16：10 討論 司会 赤澤 春彦（摂南大学・国際学部・教授）
 16：10～16：15 閉会挨拶 小池 淳一（国立歴史民俗博物館・民俗学研究系・教授）

総合司会：小池 淳一（国立歴史民俗博物館・民俗学研究系・教授）

3. 総括

かなり早くから申し込み者が多く、若干のキャンセルはあったものの、当日も満席に近い参加者があった。企画展示との連動の効果であり、内容の掘り下げへの期待が背景にあったものと考えられる。企画展示スタート直後という日程がそれを後押ししたかもしれない。テーマを「陰陽師と暦」という企画展示の内容を平易に反映したものにしたことも、それぞれに対する興味・関心を持つ方々へのアピールになったものと考えられる。

今回は事前にリモートで打ち合わせを行ない、各自の報告内容の概略を共有し、コメンテーターもコメント内容を披露した上で、当日のフォーラムに臨んだ。その結果、報告とコメントとの対応があらかじめ整理され、コメント内容を受け止めてのリプライ、討論が可能になった。司会者もあらかじめ、コメントの内容をふまえて、討論時間の割り振りを考えて進行することができた。こうした事前の検討は、討論時間が限られているだけに今後も必要のように思われる。

アンケートの自由記入欄でも報告とコメント・討論の組み合わせによって議論が深まったことを評価するものが多く、フォーラムの形式は、準備も含めて妥当かつ効果的であったと考えられる。ただし、陰陽師に期待した場合は暦に関する報告に若干の違和感を覚え、暦に興味を持つ場合は、陰陽師についてはよけいに感じるという傾向はあったようで、相互の橋渡しとなる解説があってもよかっただろう。

総じて充実した内容を発信し、受け止めてもらえたものと思われるが、コロナ禍のなかではインターネットによる発信、さらにそれ以前では内容の書籍化が行われていたことを想起すると、フォーラムという一回限りの上演にとどめずに多様かつ持続的な発信の方法、記録づくりおよびその活用を、改めて考えてもよいように思われる。

歴博映像フォーラム17

「地域文化の再構築における映像の活用」2024年1月20日（土）

主催 国立歴史民俗博物館

会場 国立歴史民俗博物館 講堂

参加者 60名

1. 開催趣旨

共同研究「歴博研究映像の総合的活用の方法論の構築—沖縄地域の映像を中心に」による研究成果の発信として開催する。令和5年度の映像フォーラムでは、沖縄県内で収集された映像資料（写真や絵画などの画像資料を含む）を主な対象として、それらの活用を通して地域の歴史や文化を掘り起こす取り組みを紹介するほか、映像資料として残すための技術的課題について検討する。

2. 開催内容

- 13：00～13：05 開会の挨拶 西谷 大（国立歴史民俗博物館・館長）
 13：05～13：15 趣旨説明 内田 順子（国立歴史民俗博物館研究部民俗研究系・教授）
 13：15～14：15 外間 政明（那覇市市民文化部 文化財課・担当副参事）
 「那覇のまちの歴史の変遷—古地図・絵画・写真を中心に」
 14：15～15：15 春日 聡（多摩美術大学・講師、国立歴史民俗博物館・客員准教授）

「超劣化フィルムのデジタル復元」

- 15：15～15：30 休憩
 15：30～16：25 内田 順子（国立歴史民俗博物館研究部民俗研究系・教授）
 「デジタル復元の成果を地域研究に活かす」
 16：30 閉会

総合司会：川村 清志（国立歴史民俗博物館研究部民俗研究系・准教授）

3. 総括

この映像フォーラムは、沖縄県で収集された映像資料（写真や絵画などの図像資料を含む）を主な対象として、これら資料の活用を通して地域の歴史や文化を掘り起こす取り組みを紹介するほか、映像資料を残すための技術的課題について検討することを目的として開催した。

参加申し込みは少なめであったが、歴博フォーラムに初めて参加されたかたが36%あり、アンケート回収率は41.7%と高く、自由記述からは、参加者それぞれの熱心な関心がうかがえる。

外間政明氏の報告では、地図や絵画、写真資料から、那覇のまちの変遷をたどるとともに、那覇のまちに暮らす人びとと、それ以外の地域に暮らす人びとの関係性等を読み解いた。またとくに、後半のふたつの報告との関連性から、超劣化フィルムの撮影者である福地唯方氏的那覇における役割についても言及された。

春日聡氏は、超劣化フィルムのデジタル復元過程を映像で示した。アンケートでは「記録映像が長すぎる」との意見も見られたが、膨大な作業時間が必要なフィルムの復元を、映像の視聴体験を通して体感してもらうという春日氏の編集意図が、視聴者に伝わったとも言えるだろう。

内田の報告では、復元された超劣化フィルムを、撮影地の人たちの意見を参考にして映画として視聴可能な形に再編集して上映した。

3つの報告の関連性については、来場者にその意図が伝わるかどうかやや懸念していた。実際、アンケートには、「発表一つ一つの内容はとても興味深く、学ぶことも多かったのですが、フォーラムのテーマについての問題提起や議論が少なかったのが残念」という意見も見られた。しかし一方で、「背景、技術、活用（研究活動）」という構成で、大変興味深く拝聴しました」という意見もあるなど、フォーラム全体としては、肯定的にうけとめられたようである。

歴博映画の会

【概要】

国立歴史民俗博物館では、日本の民俗と歴史に関する映像資料の制作と収集をおこなってきた。民俗に関する映像制作にはふたつのカテゴリがあった。ひとつは「民俗研究映像」で、当館の民俗研究系の研究者が、各々の研究対象を、専門的な視点から映像化するものである。1988年より制作を開始し、現在も継続している。もうひとつは歴博と文化庁が協議の上、「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」の中から撮影対象を選び、一般向けにわかりやすい映像を記録する「民俗文化財映像資料」である。当館ではこのほか、民俗学・歴史学関連の民俗誌映画・記録映画を収集・保管している。

これらの映像を通じて民俗と歴史への知識と理解がより深められることを期待し、2007年度より、国立歴史民俗博物館友の会の協力を得て、「歴博映画の会」を開催して上映することとした。2023年度の開催は下記の通りである。

【第40回歴博映画の会】

1. 開催主体 主催：国立歴史民俗博物館，協力：国立歴史民俗博物館友の会
2. 開催日時 2023年5月13日（土）13：30～15：30
3. 場 所 国立歴史民俗博物館講堂
4. テーマ 大和の古代寺院の年頭儀礼と鬼追い行事，その伝承
5. 参加者 107人
6. 上映作品
民俗研究映像『薬師寺花会式～行法と支える人々～』（2007年，松尾恒一，71分）
7. 内容

薬師寺の花会式は、もともと二月の仏教行事「修二会（しゅにえ）」として行われておりますが、現在は3月末にその年の年頭の祈願として行われています。美しい手作りの造花が本尊の薬師様の前に飾られるこ

とよりその名がありますが、七日間の行法の最終日には、鬼追いの行事が行われます。太鼓・銅鑼・法螺貝が激しく鳴らされる中で、毘沙門天が鬼を追い払い、参拝者が歓声をあげます。現在、開催中の特集展示『来訪神、姿とかたち—福の神も疫神も異界から—』（<https://www.rekihaku.ac.jp/outline/press/p230117/index.html>）の関連作品として上映いたしますので、本特集展示をあわせてご覧いただきたいと思います。

8. 解説 松尾 恒一（国立歴史民俗博物館民俗研究系教授）

【第41回歴博映画の会】

1. 開催主体 主催：国立歴史民俗博物館、協力：国立歴史民俗博物館友の会

2. 開催日時 2023年9月30日（土）13：30～15：30

3. 場 所 国立歴史民俗博物館講堂

4. テーマ カミが去来する ～バリ島・八重山～

5. 参加者 88人

6. 上映作品

『サンギャン —バリ島のトランス儀礼—vol.01<予祝と浄化>』（2017年、制作：春日聡、48分）

『八重山のアンガマー』（2017年、撮影・監修：坂本要 編集・整音：春日聡、33分）

7. 内容

民俗学では、神について、「去来する神」（来訪神や招来神）、「常在する神」（沖縄の御嶽の神のように、いつもそこにいるとされる神）、「巡行する神」（御輿や山車に乗って村々や家々を巡る神）の3種類に分けて考えます。

今回は、これらの分類の中から、来訪神の要素が強い八重山地方の祭儀「アンガマー」を取り上げ、調査映像を編集した記録映像を紹介します。

さらに、インドネシアのバリ島における祭儀「サンギャン」の記録映像を紹介します。サンギャンとは、（1）祭儀それ自体、（2）その際に奉じられるダンス、（3）採り物（祭儀に用いられる場合のみ）、これらの総称です。目的としては主に、非常時におこなう「悪魔祓い」、年中行事としておこなう「予祝」、随時おこなう「祈願」の3つがあり、いずれの場合も人間、村落、世界の浄化が希求されます。

バリ島の神概念についても、日本民俗学における神に関する3種類の分類を当てはめることができる部分がありますが、おしなべて同じではありません。「去来する神」ということに焦点を当て、日本の南西諸島とインドネシアのバリ島の祭儀を比較参照し、相似点と相違点を解説します。

8. 解説 春日 聡（国立歴史民俗博物館客員准教授）

[展示解説]

総合展示・特集展示ギャラリートーク

一般を対象に、本館教員が総合展示や特集展示の内容について解説し、理解を深めてもらうことを目的とした企画で、主に特集展示の解説を中心に開催している。

企画展示ギャラリートーク

一般を対象に、本館教員及び館外研究者が、企画展示内容について解説し、理解を深めてもらうことを目的とした企画である。

[特集展示関連イベント]

企画展示『陰陽師とは何者か—うらない、まじない、こよみをつくる—』の関連イベントとして「暦を作ろう」、『歴博色尽くし いろ・つや・かたちのアンソロジー』の関連イベントとして、「自分だけのオリジナル色見本を作ってみよう」、「おとなの塗り絵—縹綯彩色を楽しむ」、「赤から想起するもの世界100カ国調査」紹介」を開催した。

- ・企画展示『陰陽師とは何者か—うらない、まじない、こよみをつくる—』, 2023年10月3日（火）～12月10日（日）
 - ①「暦を作ろう」, 企画展示室出口, たいけんれきはく, 約8,000枚配布
- ・企画展示『歴博色尽くし いろ・つや・かたちのアンソロジー』, 2024年3月12日（火）～5月6日（月・休）
 - ①「自分だけのオリジナル色見本を作ってみよう」, たいけんれきはく, 約2,000枚配布
 - ②「おとなの塗り絵—縹綯彩色を楽しむ」, たいけんれきはく, 約2,500枚配布
 - ③「赤から想起するもの世界100カ国調査」紹介」, 企画展示室出口, QRコードを掲示